

## 独立の精神と普遍的人間愛 — ロマン・ロランと魯迅 —

*Independent Spirit and Universal Human Love — Romain Rolland and Lu Xun —*

區 建英\*

### 目 次

一	東洋と西洋における二人の文学巨匠
1	引き裂かれた歴史・文化を背景とした二つの個性
2	ロマン・ロランの生い立ちと文学活動
3	魯迅の生い立ちと文学活動
二	「真勇」を生み出した独立の精神
1	ロランにおける英雄の魂の復活
2	魯迅における徹底的な自己否定
三	国境なき人間愛
1	全地球を包含するロランの共和主義
2	奴隷と奴隷主を同質に見る魯迅
四	ロマン・ロランと中国

### 一 東洋と西洋における二人の文学巨匠

#### 1 引き裂かれた歴史・文化を背景とした二つの個性

19世紀末から20世紀初めにまたがる時代において、地球の東西両側に二人の文学巨匠が現れた。一人はフランスのロマン・ロラン（1866-1944）であり、もう一人は中国の魯迅（1881-1936）である。ロランと魯迅の思想や文学活動は、この時代の人類が抱えた苦悩と感情をみごとに反映し、広く人々の共感を呼んだ。

もちろん、同じ19世紀末から20世紀初めといっても、当時、ロランの祖国であるフランスと魯迅の祖国である中国はそれぞれ、文化的背景も国の事情も非常に違っていた。フランスは早くも18世紀の啓蒙時代に多数の優れた思想家を輩出し、近代的な意識革命の先端をリードした国であった。これに対し、中国は数千年の伝統的な文明と秩序を固持しながら、西欧文明の衝撃を前にして、その伝統文明が崩壊しはじめた頃の国であった。また、フランスはアンシャン・レジーム（旧制度）に対する大革命が平民のレベルまで浸透して行われ、さらに産業革命の洗礼を受けた近代国家であった。これに対し、中国は腐り果てた封建体制が頑固に存続した中で、欧米列強に侵略され抑圧され、半封建・半植民地の境地に陥った国であ

\*OU, Jianying [情報文化学科]

った。このように違った両国の歴史背景と文化空間、それに、ロマン・ロランと魯迅のそれぞれ違った個性によって、明らかに異なる二つの文学の形象が生まれた。

ロマン・ロランは生涯において、数多くの戯曲や英傑の伝記、また『ジャン・クリストフ』、『魅せられたる魂』のような大河小説をはじめ、多くの小説を書いた。これらの作品は題材も形式も違っているとはいえ、そこに共通する性格が見られる。作品に描かれた主要人物は基本的に、社会の進歩に対する深い信仰を持ち、あえて卑俗の世界に反抗し、自分の天職を果たすために不屈な精神をもって戦い続ける、というような積極的な人間であり英雄であった。しかし、これらの英雄にはほとんど苦しい戦いの果てに敗北するという運命が待っている。彼らは苦悩と孤独の中に奮闘する悲劇的な英雄である。ロランは偉大な魂を持つ英雄像を次々と創造し、人に光と力を与えたが、また同時に、英雄の光をもって、世の中にある無知・愚昧・偏狭・暴虐・利己などの暗い側面をも映し出した。

これと対照的に、魯迅は明らかに違う創作風格を示している。『狂人日記』や『阿Q正伝』などの代表作をはじめ、彼の生涯に書かれた作品の多くは主として、社会の暗黒とその病根を暴露するものであり、そこに登場する主要人物は基本的には、無知・愚鈍・卑屈・狡猾などの悪徳に汚れた醜悪な人間であった。魯迅はこのような、血肉をそなえた奴隷の悲劇を描写することによって、中国人の病態的な精神を典型的に表現し、中国人に自分のみっともなさや惨めさを、嫌というほど思い知らせようとした。しかもこの場合、魯迅自らは、暗黒の外に立つ輝かしい英雄としてではなく、自分も暗黒の中にいる一人として覚醒し、同じ運命に置かれた人々に、空気と光をみずから獲得せよと大声で叫んだわけである。暗黒の中にいる覚醒者による暗黒暴露、これは魯迅の文学を特徴づけたものである。

およそ、近代小説には内容的に二つの側面がよく見られる。その一つは封建的な秩序や道徳に対する批判と反抗である。今一つは近代市民社会の積極的な人間像を創り出すことである。だとすれば、ロランは主として後者の方に創作の特色を示したが、これに対し、魯迅は主として前者の方に力を入れたといえよう。ロランは英雄の悲劇を書いたが、魯迅は奴隷の悲劇を描いた。もちろん、魯迅にも積極的な人間像を描く作品はあった。それは生涯の最後近くに書かれたものである。とにかく、ロランと魯迅とがそれぞれ創った文学の形象は、これほど性格が違っている。この違いは二人の個性を反映していると同時に、二人が生きた国の歴史的背景と文化空間とも密接に関連しているといえよう。

## 2 ロマン・ロランの生い立ちと文学活動

ロマン・ロランが生まれたのは、第二帝政時代の末期であった。当時のフランスは、すでに反封建の大革命をくぐり抜け、産業革命もかなり進んだ市民社会であった。また、パリ・コミュンに見られるように、都市の勤労大衆は社会や政治の変動に対し、ただ観客として傍観するのではなく、自ら高い関心を示し、積極的に参与したのである。ロランは共和制を愛するような知的環境の中に成長した。彼の故郷は共和主義の伝統が強かった。身近には、大革命に参加した父方の曾祖父がおり、また、母方の祖父もたえず知識を求め、社会のいろいろな文化事業に積極的に尽力する近代市民であった。ロランはこうした精神を継いでいる。しかし、彼が生きた時代は、戦乱が頻発し人間が互いの憎悪に陥った時代である。すべての若者にとって「死はいつも現存している」。戦争への出発命令を待つ若者たちには「未来の計画を立てることは不可能である」(1)。戦争か平和か、独裁か共和かというような問題は、つねに若きロランの心を苦しめていた。

中学校時代から、ロランは独自の思想傾向を示していた。彼は哲学の思考に優れた素質を持ちながら、学校で教えられた伝統的な合理主義には共感できなかった。むしろシェイクスピア・ベートーヴェン・ワーグナーに心酔し、スピノザ・ユゴー・トルストイなどに傾倒したのである。ロラン自身の記述によると(2)、彼はその思想形成において「三つの閃光」を経験した。つまり、ヴォルテールが長く住んでいたフェルネーの台地(テラス)からの啓示、スピノザからの啓示、そしてトルストイからの啓示であった。

1882年の夏、16才のロランはスイスに行き、フェルネーの台地で、調和にみちた美しい自然に抱擁されて衝撃的な感動を味わった。自分がはじめから自然のものであったという突然の啓示を得たのである。同年の冬、彼は書店で買い求めたスピノザの『エチカ』を読んで、「存在する一切のものは神の中に存在する」という汎神論から、もう一つの閃光を経験した。後に「真なるゆえにわれ信ず」という論文を書いて、自分の自我にも他人の自我にも普遍的な実体である神が存在することを認め、自分と他者との連帯性への自覚を示している。

1886年高等師範学校(大学)に入る少し前のある時、ロランは北フランスへ列車の旅をした。列車はトンネルの中で突然止まり灯が消え、人々は不安に騒ぎ出した。ロランは物思いに耽ったところ、自分がいつしかトンネルの中を抜け出し、日光に浸かっている野原に立って、無数のあげびばりを見ているような気持ちに襲われた。いつ自分が押しつぶされるかもしれない列車の中にいながら、彼は「僕は囚われにはならない」と感じた。ほぼ一年後、彼

はトルストイの『戦争と平和』を読んだ。フランスの捕虜になったピエールが、一面に月光を浴びている森と野を越えて遠方を凝視して、「これらすべては僕のものだ」、「これらすべては僕の内にいる」と叫び、自分が自由であることを悟った。この箇所を読んで、ロランはかつて威嚇に充ちた闇のトンネルで経験した自由の自覚を思い出して、心が顫えるほど感動し、第三の閃光に巡り合った。

ロランは博大な自然に対する豊かな感受性を備え、個性と自由の精神を深く愛着した。高等師範学校には文学、哲学、歴史の三つの学科があったが、彼は文学科が擁護した権威の文学批評の保守的偏見にも、哲学科の「法王的精神主義」の支配にも嫌悪を感じ、歴史科を選んだ。事実を厳密に探求し、死んだ英傑たちの魂をふたたび蘇えらせることが彼の関心事であった。彼は20代半ばから創作を始め、「オルシーノ」・「バグリオーニ兄弟」・「カリグラ」・「ニオベ」・「聖王ルイ」・「マントーヴァの包囲」など、多数の劇作を書いた。これらの初期の劇作には、19世紀末のフランスに衰えていた信念と理想の精神力を再び蘇らせようとする情熱が溢れている。

いうまでもなく、当時のフランスが抱えていた課題は、中国が直面していたような、腐り果てた封建制との戦いではなかった。それはむしろ、19世紀の近代文明の中から生まれてきた様々な問題との対決であった。人類史の画期を遂げたフランス大革命は多くの矛盾と問題を残し、偉大な産業革命が進んだ反面、精神の頹廃や政治の墮落も氾濫していた。相つぐ戦争が度重なって行われた結果、民族と民族との間に憎悪が生まれ、ナショナリズムは偏狭なものに墮落した。普仏戦争（1870-71年）における惨敗で、フランス国民は対独報復の感情に包まれ、この民族感情は非常に高まり、共和制の基礎を揺さぶる要素ともなった。このような背景の下で、ロランはフランス大革命を題材として八つの革命劇を書き、革命における理性と民衆とのジレンマを提示し、また独仏の和解という切なる念願を込めて、『ジャン・クリストフ』を執筆した。またほぼ同時に、ベートーヴェン・トルストイ・ミケランジェロなどの近代英傑の伝記を次々と書いた。

いったい、ロランの目には時代がどう映っていたのであろうか。『ベートーヴェンの生涯』で、彼は次のように述べている。「空気は我らの周りに重い。古い西欧は、毒された重苦しい雰囲気の中で痲痺する。偉大さの無い物質主義が人々の考えにのしかかり、諸政府と諸個人との行為を束縛する。世界が、その分別臭くてさもしい利己主義に浸かって窒息して死にかかっている。世界の息が詰まる」(3)。この息詰まる世界に「もう一度窓を開けよう。広い大

気の流れ込ませよ。英雄たちの息吹を吸おうではないか」(4)。これはまさしく、ロランが見定めた自分の使命であった。

### 3 魯迅の生い立ちと文学活動

魯迅が生まれた時の歴史的背景は、ロランの場合と違っている。当時、中国はアヘン戦争によって屈辱を受け、主権と国威を次第に失っていった時期にあった。魯迅が青少年へと成長していく過程で、日清戦争が起これ、中国はこの戦争で惨敗を喫し、その結果もっと多くの主権を喪失し、半植民地の境涯に追い込まれはじめた。この背景の下で、若い魯迅の心に、深刻な民族危機感が生じたのである。

他方、彼は少年時代から、封建道徳の因襲が重くのしかかった環境の中に生活していた。それゆえ、封建的な人間関係による人間性の歪曲と破壊を身に滲みて感じた。祖父は科挙(高級官僚採用の国家試験)で最高レベルの「進士」に合格し中央高官になった人である。しかし、父親は科挙の予備段階で合格し「秀才」になったが、それ以後何度受験しても次の段階の「挙人」に合格せず、ついアヘンを吸い始めた。息子の意気地なさに腹を立てた祖父は、主考官に贈賄し息子の合格を頼もうとして露見された。科挙の不正は大罪であるため、祖父は死刑の執行猶予の刑を受け投獄された。父親は「秀才」の資格を剥奪され、重い病気にかかり、いい治療を受けることができず、死んだ。こうして、魯迅は13才頃から、家運の衰退の苦しみを体験した。家運がどん底まで落ちた時、親族や周囲の人にいじめられ軽蔑され、魯迅は深刻な屈辱の中で人間の真実を見る契機を得た。

1898年、17才の魯迅は封建官僚としての立身の道を捨て、因襲の故郷を脱出し、洋式学校の江南水師学堂(海軍学校)、後に鉱務鉄路学堂(鉱山鉄道学校)に入学し、西洋の科学に触れはじめた。1902年、21才の魯迅は官費留学生として日本に留学する機会を得た。父と同じように病に苦しむ中国人を救おうとして、彼は医学を志した。ところが、仙台の医科専門学校の教室で、魯迅は衝撃的な幻灯を見た。それは、ロシアのスパイとして処刑される中国人とそれを取り囲んで見物している大勢の中国人の写真である。この幻灯は魯迅に大きな衝撃を与えた。中国の民衆は無知蒙昧で、惨めな運命に置かれても知らず昏睡している有り様で、魯迅は痛感したのである。「およそ、愚弱な国民は、たとえ体格がどんなに健全で、どんなに長生きしようとも、せいぜい何の意味もない見せしめの材料とその観客になるだけである」(5)。

そうした国民の肉体を救うより彼らの精神を変える方が急務だということを認識した。これがきっかけで、魯迅は医学をやめ文学を志し、仙台から東京に赴いたのである。

東京留学の時代、魯迅は19世紀西欧の「文明批評家」ニーチェやロマン派の代表的な詩人バイロンなどの思想や文学に接触し、そこから、自分の伝統とはまったく異質な、近代的な人間像を発見した。中国人の精神の救済を、ニーチェが言った「超人」やバイロンのような詩人・文学者の出現に託しようとした。詩人的な英雄の光によって、中国社会の暗黒が破られ、虚偽が除去され、曙の光明を迎えることができると、彼は考えた(6)。

すなわち、魯迅は中国の社会変革を精神革命の過程として二極の構造を想定していた。その一極は「心の声」をもって国民の奴隷根性を駆除し、「内なる光」をもって国民一人一人の主体性を呼び醒まし、中国を独立へ導いていく詩人たちである。もう一極は、詩人が発する「心の声」を受けとめて立ち上がる素朴な民衆である。魯迅もロランのように、「息詰まる世界」に英雄の息吹を吹き込もうとし、しかも中国の民衆の覚醒を心から期待していた。彼は「摩羅詩力説」で、ゲーテやバイロンなどの詩人を「精神界の戦士」として称え、文芸運動を提唱した(7)。「精神界の戦士」が「腕を振って叫べば」、民衆は素朴な心でこれに共鳴し立ち上がるのだと、楽観的に信じていた。もちろん、彼自身もこのような「精神界の戦士」になぞらえて文学活動に奮起したのである。

しかし、辛亥革命後のいろいろな挫折を経て、魯迅はかつてない「絶望」を経験するようになった。革命派が弱かったため、革命成功の果実は北洋軍閥袁世凱の手に落ちた。アジア最初の共和国である中華民国はまだ民主主義の実現に一歩も踏み出さないうちに光明と希望が消しさられた。袁世凱政権は、宋教仁暗殺の事件をはじめ革命党人を一掃するような弾圧と統制を行い、また日本から押しつけられた「二十一カ条要求」を受諾し、帝政復活を演じるという恥ずべき結末となった。袁世凱が死んだ後、北洋軍閥が分裂し、各地で大小軍閥が割拠し、中国は軍閥混戦の時代に陥ったのである。

魯迅からみれば、こうした革命の失敗と政治の墮落は決して新しい事態ではなかった。これをもたらした根本的原因はほかでもなく国民自身の悪い根性にある。辛亥革命は結局、民衆を目覚めさせることができなかった。『両地書』で、彼は次のように述べている。「二次革命が失敗して以来、状態がますます悪くなり、今日の有り様になっている。これは新しく加わった悪さではない。上塗りの新しいニスが剥げ落ちたため、古い顔が再び現れてきたという現象に過ぎない」。革命の最初は「排満」だからで容易にできたが、次に国民自身の悪い根

性を改革することになると、行き詰まってしまう。中国人の奴隷根性は少しも変わっていない。「奴隷に家政を任せて、うまくいくわけがない」(8)。

ところが、魯迅を絶望させたもう一つの事態は、彼が待望した精神的な英雄も中国に存在しないことである。彼が呼びかけた文芸活動への反響もきわめて少なかった。はじめて創刊しようとした雑誌『新生』(新しい生命)は挫折し、雑誌『新青年』の創刊も当初は、「賛同の人もいなければ、反対の人もいなかった」(9)。魯迅は耐えがたい「寂漠」を感じた。『『呐喊』自序』でこの心情を次のように語っている。「人の主張は賛成を得れば前進を促し、反対されれば奮闘を促すが、ただ叫びをあげても、人々は一向に反応を示さず、賛成するのでもなければ反対するのでもない場合、あたかも身が無辺の荒野に置かれたように、ほどこしようもない。これはなんと悲しいことであろう」(10)。

かつて詩人的な英雄に賭けた魯迅の夢は、深い「寂漠」となり、後々になってもこの「寂漠」が消えないばかりか、「一日一日」と募ってきた。これらの挫折を通じて、彼は中国の国民レベルの低さ、精神の面における国民の鈍感さを痛切に知らされた。そして、自分が決して「腕を振って叫べば応ずる者が雲の如しという英雄」ではない、という反省に至った。彼の文学風格の原点はこの暗黒時代の絶望的体験に立っている。「寂漠」の苦痛の中で、魯迅は『狂人日記』や『阿Q正伝』などの、社会の病弊と国民自身の醜悪を暴露する小説を書き始めた。こうして、魯迅は小説家として出発した。

## 二 「真勇」(11) を生み出した独立の精神

ロランによる英雄の悲劇、魯迅による奴隷の悲劇、このきわめて違った文学形象は、図らずも独立の精神と人道主義という点で共通の思想的主題を表している。

### 1 ロランにおける英雄の魂の復活

ロランの文学作品は、19世紀末のフランスにはやっていた自然主義と違って、高い思想性、倫理性を持っており、人間の主体的精神の表現を特徴としている。たとえば、19世紀後半から第一次大戦におよぶ世代で、自由と進歩を求める人々の精神的な苦しい摸索を描いた『ジャン・クリストフ』、また20世紀初頭から反ファシズム運動がおこった30年代にわたる世代で、

光明を探索し真理を求める人々の戦いを主題にした『魅せられたる魂』は、その典型である。

19世紀末の西欧社会は、卑小な物質主義と利己主義に陥り、かつて啓蒙時代や革命時代に見られた人間の偉大な精神や気高い品格が死滅したようになり、個人の自由と良心は、理性の欠けた大衆情感の波に呑み込まれ、社会の英知は全体主義的な「民主」によって埋没させられていた。また、偏狭な民族感情と人間相互の憎悪に駆り立てられ、世界は残酷な争いや殺戮が繰り返された。

ロランは世紀末の物質文明に伴っているこうした精神の頹廃と政治の墮落を鋭く洞察し、新鮮な空気をこの世界に吹き込み、死滅に瀕している人間の精神を生き返らせようと考えた。ロランに近い過去また彼の同時代には、英傑たちが存在していた。ロランはこれら死んだ英傑の魂たちに自分のかりそめの生命の宿を提供し、彼らに化身する。英傑たちの苦しみに満ちた戦いの生涯を活写することによって、同胞や人類とともに、偉大な精神の息吹を吸おうとした。さらに、『ジャン・クリストフ』や『魅せられたる魂』に登場する現代の英傑をみずから創造した。1931年の復活祭で書かれた『ジャン・クリストフ』の序説で、ロランは創作の意図を次のように表している。「私が『ジャン・クリストフ』によって引き受けた義務は、フランスの精神的な、また社会的な崩壊の一時代に、灰の下に眠っていた魂の火を再び目ざますことであった」(12)。

ロランが創造した小説の主人公およびそれと関わる多くの人物の群像は、時代の矛盾と人間の複雑な精神状態を典型化したものである。その主要人物の典型的な性格は、所与の社会環境に追従して変化するものではなく、主体的に環境に取り組む、という特色をもっている。たとえば、ロランはジャン・クリストフを西欧近代文明の矛盾の渦中に置き、各階層の人物と交えさせ、様々な重大事件に接触させ、各種の時代的な難問に直面させた。その過程において、クリストフの反抗の精神、超人の奮闘精神が浮き彫りにされる。クリストフは偏狭・卑俗・虚栄的な雰囲気に取り込まれた社会にしながら、その包囲を打ち破って精神的に超越し、芸術の真実性と純潔性を追求し守り続けた。ロランはまた、クリストフを通じて、一切の偶像や権威にあえて挑戦し、腐敗的な社会現象や虚偽・低級な精神や文化現象を大胆に否定する、という批判精神を表現した。

もちろん、ロランが創造した人物は理性だけの単なる乾燥無味な化身ではなかった。現代の英傑として描かれたクリストフは、なにひとつ過ちをおかさない聖人ではない。この人物は軽率で自負心が強く、粗野で怒りっぽく、その欠点はその美徳に負けないほど多かった。



その魂の偉大さは、自分の卑俗な品性に屈服せず、内心の敵と戦い続けるところに現れる。また、クリストフは社会という戦場でつねに勝つ英雄でもない。ただ、いくたびの失敗を重ねても挫折せずに前進するということに、超人の奮闘精神が現れる。こうして、ロランは真実さと偉大さを結び付けるという手法で、現実の生活における偉大な精神の存在について語った。ロランは『ジャン・クリストフ』を書き終わった時、その巻末で創作の手法についてこう述べている。「今や過ぎ去ろうとしている一世代の悲劇を私は書いた。その世代のさまざまな悪徳と美徳、重苦しい悲哀、混沌たる自負心、超人的な一つの任務の、あまりにも重い荷に押しつけられながらなされた雄々しい、いろいろの努力、それらすべてを私は、何一つ隠しだてしようとはしなかった。その重い任務とは、世界の一『総体』を、一つの道徳を、一つの美学を、一つの信仰を、一つの新しい人間性を作り直そうとする仕事であった」(13)。

ロランが創造した現代の英傑ジャン・クリストフは、ロラン自身でもある。ロランは社会の進歩と民族間の平和を希求するために、あえて世間の大勢に逆らって堂々と文明批評を展開する。第一次大戦の頃、各国の指導者ばかりでなく、文学者や哲学者などの知識人までもが、戦争を崇高なものとして賛美した。このような背景において、ロランは毅然としてその雰囲気と対決し、『戦いを超えて』という戦争批判論を公表した。このため、彼は民族感情からの憎悪を招き、非国民という罵声を浴びせられ、パリの批評家に黙殺され、フランスの上層に敵視され、親戚や知人から離反と排斥をも受けた。1915年スウェーデン政府はロマン・ロランにノーベル賞を授けようとしたが、フランス政府の反対によって、授賞の公布は1916年末まで延ばされた。

孤立の立場に置かれたロランの苦しみは深刻なものであったろう。しかし彼にとって、何よりも恐れるのは独立精神の死滅である。普仏戦争のときには、まだ戦争反対に立ち上がる人々はいたが、今度はヨーロッパの諸国民はこぞって戦争に熱中し、社会主義者やカトリック教徒さえも躊躇なく戦争に賛成した。ロランは排他的な愛国主義の狂信に祖国フランスの破滅を感じた。戦争中、彼は「万人に反対する一人」という仮題で作品を書き、個人の魂が群衆のエモーションに呑み込まれるという理性喪失の実態を暴き、後に「クレランポー」という小説として公刊した。1919年に「精神独立宣言」を発表し、組織の拘束を受けず自分の良心に従い使命を果たし抜くよう、知識人に訴えた。こうして、ロランは大きな勇気と強靱な信念をもって、万人が熱中した戦争に抵抗する一人の自由な良心を保ち続けたのである。

## 2 魯迅における徹底的な自己否定

魯迅の文学もロランのそれと同じく高い思想性、倫理性を持つものである。彼が文学に関心を寄せるようになったきっかけは、中国の滅亡に対する危機感であった。封建的な因襲と対決し、中国を植民地化の深刻な危機から救おうとする彼の志は、終始その文学活動に貫かれている。いうまでもなく、魯迅は批判の鋒先を帝国主義列強の侵略に向け、清朝の暴虐な封建支配に向けた。しかしそれ以上に、彼は抑圧される立場に置かれた中国の民衆そのものを批判の対象としたのである。このような姿勢を取った理由は主として次の二点が考えられる。その一つは、中国の運命逆転の契機を民族自身の内部にしか求められず、社会変革と民族独立を担う主体は、被抑圧の中国民衆にしか求められないという魯迅の考え方による。もう一つは、長期にわたって奴隷のように抑圧されてきた民衆は主体性が欠けており、しかもなかなか目覚めなかった、という中国民衆の実態に対する彼の痛切な認識による。

当時、中国の改革潮流には、西欧の「富強」（富と力）の秘密を科学技術およびその成果に求めるという傾向が強かった。魯迅も青年期から科学に関心を持つようになった。しかし、科学に対する魯迅の理解は独特なものであった。すなわち、彼は西欧の近代科学を、単に自然と社会に関する個別な知識として理解するのではなく、それらの知識を生み出した人間の主体的な精神態度として捉えたのである。したがって、中国の危機の原因が単なる軍備や国富での立ち後れではなく、民族の魂の衰弱そのものにあると考えた。魯迅は「国民性の改造」を一貫した課題とし、その文学は終始、被抑圧者の主体性を思想的主題とした。

「国民性の改造」に当たって、魯迅が求めようとした「精神界の戦士」は、強靱な主体的精神を持ち、万難を排してひたすら向上するような「超人」である。「今日、待望されるのは、衆人の騒がしい議論に同調することなく、独立した自己の見識を持して立つ人物のあらわれることである。彼らは世間の真実を深く洞察し、敢えて文明を批評する。惑える者と是非を同じくすることなく、ひたすら己れの信ずる所に向かって進んでいく。……こうした人物が現れてこそ、天日の光をもって暗黒を照らし、国民の内なる光を発揮させることができるであろう。人おのおのが自己を持ち、時流になびくことがなくなれば、中国もまたこれによって存立を全うすることができるのであろう」と彼は述べた（14）。

しかし、辛亥革命後の中国には、現実性を備えた近代的な中国人像を造り上げる条件が存在しなかった。辛亥革命で置き去りにされた底辺の民衆は、奴隷根性に浸かっているままで無感覚であった。その中で、魯迅の文学活動は、苦悩と困難に満ちた曲折の道程を辿らな

ればならなかったのである。

『『呐喊』自序』で、彼は無知鈍感な中国国民を、「窓もない鉄の家の中に熟睡する人々」になぞらえてこう述べた。「例えば、一軒の鉄で造られた家がある。それは窓がなく、しかも頑丈で破りにくいものである。その中に多くの人が熟睡している。彼らはまもなく窒息して死んでいく。むろん、昏睡の状態から死滅に入るのだから、死の悲哀も感じないであろう。しかし、もし今、あなたは大声で叫び、いくぶん意識のある数人を起こし、これら少数の不幸な者に自分がもはや救われないということを知らせ、臨死の苦しみを受けさせれば、これは彼らに対する思いやりなのであろうか。……しかしこの数人は起こされて目が醒めた以上、鉄の家を壊す希望がないとはいえないであろう」(15)。魯迅は暗黒の中に昏睡している人々を起こし、彼らに自分の悲惨な運命を知らせようとした。『狂人日記』『阿Q正伝』などの小説は、リアリズムの方法によって現実を再構成し、民衆の病態的な精神を典型化し、中国人の覚醒を促そうとした苦心作である。

『狂人日記』は、醒めた狂人の目を借りて、「仁義道德」で飾られた歴史に潜んでいる「食人」(人が人を食う)という社会の本質を根底から暴露した作品である。この作品で、魯迅は被抑圧者である中国民衆の臆病と残忍さを容赦なく抉り出した。狂人が見た村人の目つきはみな恐ろしいものであった。それは「人間を食いたがりながら、他人から食われることを恐がって、互いに疑心に満ちた目つき」であった。狂人は村人の臆病を見て、大声を出して笑ってやったが、「私は勇気があるので、彼らは……ますます私を食おうと思うのである」と狂人は言った(16)。この社会において、「食人」という世俗の風習を離脱しようとする人はまず食われてしまうのである。そこには人間の自立性もなく他者への愛もなく、人間性が酷く歪められている。魯迅は人間の主体性を抹殺する無残な現実を指摘した上で、さらに、被害妄想に陥った狂人を、自分も人を食う人間の一人であると自覚させ、徹底的な自己否定と改心へと導こうとした。

『阿Q正伝』は中国人の国民性の典型として阿Qの奴隷根性を冷酷に描き出した作品である。無知・魯鈍・狡猾などの悪徳を一身に集めた阿Qという人物の描写には、奴隷的な民衆の俗物性に対する魯迅の強い嫌悪が滲み出ている。しかし、阿Qの醜悪さと悲惨な運命についての手厳しい描写には、中国民衆に対する魯迅の深い愛と責任感が溢れている。そうした民衆は暗黒の鉄屋に昏睡し、まもなく窒息して死んでいく惨めな人々である。魯迅自身も暗黒の中で目覚め、悲惨な運命を知って苦しむ人である。醒めた自分の苦痛は耐え難いものである

にもかかわらず、彼は敢えてみんなを起こして一緒に、醒めた時の苦しみを体験させようとした。もっとも、魯迅が徹底的に否定しようとしたのは奴隷根性であって、中国人の精神ではない。「阿Q」の苦しみをともに味わうことは、民衆の深い奥に眠っている主体性を蘇らせようとする治療の過程である (17)。

### 三 国境なき人間愛

19世紀末から20世紀初頭は帝国主義の時代であった。この時代の世界は、帝国主義列強と植民地という二極構造に分かれていた。ロランの祖国は列強の国であり、魯迅の祖国は植民地化の危機に置かれた被抑圧国であった。当然、二人がそれぞれ抱えた課題は非常に違っただけである。しかし、彼らは自分の祖国が置かれた正反対な立場を超えて、一つの共通した根本的な課題を追求しようとした。それはすなわち、国家のエゴイズムを克服して人類の共同の幸福を目指そうとする普遍的な人間愛である。

#### 1 全地球を包含するロランの共和主義

ロマン・ロランは同時代の多くのフランス人と同じように、共和制を強く愛したが、ロランを特徴づけたのはこの点ではない。彼の特徴は祖国フランスよりも共和主義の方を大切にするとところにあった。だからこそ、ロランは普仏戦争の敗北以降、フランス国民が抱いたドイツへの報復感情を超越することができた。

1870年、第二帝政がプロイセンとの間に引き起こした無謀な戦争（普仏戦争）で、フランスはわずか三カ月で敗れた。帝政に代わった臨時国防政府も対外的に無力のため、戦争賠償と領土割譲を伴う講和条約に調印した。この惨憺たる結末によって、フランス国民の屈辱感といきどおりが頂点に達した。ドイツに対する強烈な民族感情が後にも長く持続していた。敗戦後10数年経った1888年、ブーランジェ將軍が民族感情を扇動し、フランスの反独熱はふたたび高揚した。その中で、ブーランジェは凱旋將軍のように人氣が頂点になり、フランスの民衆は彼の政權奪取を擁護した。しかし、ロランはブーランジェがバリから選出された時を「すべての共和派にとっては不吉な日」とし、「ブーランジェ派の恥ずべき汚点が、いまにフランス全体に及ぶだろう。そうなれば、私はフランスを去るだろう。ここで生活すること

は私にはもはやできないだろう。自由を否定する国は私の祖国ではありえない！」と、記述している (18)。

この記述に示されたように、ロランの愛国は他の民族を排斥するような偏狭で卑小な愛国とは本質的に違っており、それは共和と自由という普遍的な精神に基づく理性的な愛国である。フランスは単に自分の生まれた国だからではなく、共和主義の栄光を持っているから、愛すべき祖国なのである。逆に共和の精神を失うと、彼は取えて自分の国を祖国として認めなくなる。ロランはまたこう述べている。「私は自分がフランス人であること以上に共和国民であるのを感じる。私は共和国のために自分の祖国を犠牲にするであろう。自分の生命を神に犠牲にすると同様に。全地球を包含するであろう未来の共和国を私は信ずる」(19)。

『ジャン・クリストフ』において、ロランはドイツ人のクリストフを主人公にし、フランス人のオリヴィエをその親友にし、二人の親交を描写することによって、偏見と憎悪の克服、国家間の親善友好と世界の平和を唱えた。彼はフランスとドイツとの緊張関係について、クリストフとオリヴィエを議論させて、次の言葉を吐き出した。「僕は僕の国を愛している。それは君と同様だ。僕は僕のだいな、なつかしいフランスを愛している。しかし僕はフランスのために自分の魂を殺すことができようか？ フランスのために僕は自分の良心を裏切ることができようか？ 自分の良心を裏切るとはフランスそのものを裏切ることだ」(20)。

このような、民族や国家の偏見を脱却し人類を抱え込むロランの愛の心は、さらにヨーロッパを超えてアジアに伝わってきた。1925年1月に書かれた「ジャン・クリストフから彼の中国の兄弟たちへ」というロランのメッセージが、雑誌『小説月報』(17巻1号1926年1月)に掲載された。その内容は次の通りである。

「私は何がヨーロッパで、何がアジアなのかを知りません。私はただ世界には二つの種族があることを知っているだけです。一つは向上する魂の種族であり、他方は墮落する魂の種族です。

一方の人たちは、忍耐づよい、情熱的な、変わる事のない、勇敢な力によって、光明--一切の光明、すなわち、科学、美、人間愛、共通の進歩にむかってつき進んでいます。

他の一方は抑圧の勢力、すなわち暗黒、無知蒙昧、残虐無道、頑迷固陋の偏見と粗暴なふるまい、です。

私は前者とともにいます。その人がどこから来ようと、その人は私の友人であり、同盟者であり、兄弟なのです。自由の人類は私の祖国です。すべての偉大な民族はこの祖国の一つの部

分です。そして、すべての人の財産は空の太陽なのです。1925年1月 ロマン・ロラン」(21)。

このメッセージは、帝国主義と封建勢力の重圧下で自由と解放を求めるために命がけで戦っていた中国青年に大きな励ましを与えた。満州事変が起こった時、ロランはアインシュタインらと共同で、日本の中国侵略を非難する声明を発表した。抑圧の勢力と戦う人々のそばには、ロランの正義の声が常に伴っている(22)。

## 2 奴隷と奴隷主を同質に見る魯迅

ロランと違って、魯迅が直面していたのは、存亡の瀬戸際に置かれた半植民地の中国と、膨張の欲望が猛進した帝国主義列強の支配と抑圧であった。魯迅は、嚴復(1853-1921)の『天演論』(ハックスレーの『進化と倫理』の翻訳)を読んで、「倫理の過程」という意味で進化論の思想を受け入れた。もとより、魯迅が抱えた中国の社会変革と独立という課題は、同時代の中国知識人が共有した課題である。しかし、当時、ひたすら富国強兵に務め、中国を強国にしようとするのは、一般的な考え方であった。魯迅は敢えてそういう考え方を、精神的根底が欠けた浅薄なものとして批判した。彼は世界に横行していた弱肉強食の論理にのめり込むような「民族独立」の傾向とは無縁であった。

魯迅からみれば、強者に成り上がるような道は独立の正しい道ではない。というのは、強者になる道は、必然的に新しい弱者を仮定することにつながるからである。奴隷が主人に変わり、弱者が強者に成り上がることは、奴隷抑圧と弱肉強食という現状の再生産に過ぎず、決して真の独立と解放ではない。また、単なる物質的な強大化は必ずしも文明進歩を意味しない。「精強な軍事力を借りて、人を殺してより多くの領土を奪う事をもって祖国の栄光とする、という考え方は獣性の愛国である。人類は禽獣や虫類のレベルを超えようとするなら、獣性の愛国を慕ってはならない」(23)。魯迅は「獣性の愛国」を、人間が人間にまで進化する以前の野獣性が表れる段階のものとし、程度の低いものとした。この観点から、彼は列強の植民主義と、自国の栄光を他民族の奴隷化の上に築くような、偏狭で排他的な愛国主義に批判を加えた。

もっとも、魯迅は強者を憧れる奴隷の精神を、「獣性の愛国」より一段とレベルの低いものと見なしている。彼は中国人の奴隷根性を次のように厳しく批判した。「我が国には、志士たちをはじめ世を挙げて、アメリカの侵略や凶暴なロシアとドイツを楽園のように憧れる傾向

がある。しかし、ほんらい心から同情を寄せるべきインドやポーランドといった亡国の民には、却って冷たい言葉で侮蔑し誹謗している」。中国は長い間、帝国主義の強圧を受けて苦しんできたのに、志士たちは何故、自分と同じ運命のインドやポーランドに同情と共感を持たないのか。その原因は奴隷根性にある。つまり長期にわたって、凶暴な抑圧に屈服し奴隷根性が養われたため、侵略者の程度の低さを忘れ、自分自身の見識を失い、一般の騒がしい議論に同調してしまったからである (24)。

魯迅において、奴隷と奴隷の主人とは本質的に違うものではない。「奴隷と奴隷の主人は同じである」というのは彼の重要な思想である。「およそ奴隷の主人である者は、また容易に奴隷に変わる。というのは、彼は一方において、奴隷の主人となり得ることを認めたのであるから、当然、人の奴隷となり得ることも認めるわけである。したがって、一たび威勢を失うと、彼はたちまち新しい主人にいちずに従順するのであろう」(25)。また逆の場合、奴隷の主人を憧れる奴隷もその論理が同質である。奴隷も奴隷主と同じように人を酷使し抑圧する傾向を持っている。かつて酷使されていた奴隷は奴隷主に変身すると、より暴虐な抑圧を行う場合がある。この両者はひとえの布の両面に過ぎない。抑圧される奴隷の立場を脱しようとするならば、奴隷主の立場をも同時に否定すべきである。

魯迅は人類の進化を、奴隷、野獣から「真の人間」へ進化するという「倫理の過程」としている。彼が考えた「真の人間」は、自立的で高尚で博愛の精神を持つ人である。しかし、中国人は『狂人日記』に描かれたように、独立の精神および他者との連帯の精神を備えていない。したがって、彼からみれば、中国が軍備や国富の面における弱者であるという立場よりも、中国人が「真の人間」としての「精神」を欠いていることの方が最大の憂慮である。中国はまさにこれゆえに、淘汰され滅亡してしまうのであろう。魯迅のナショナリズムはインターナショナリズムの中に確立されている。この点は「五・四」新文化運動の世代において典型的である。彼は一方において、他国を奴隷にする列強の帝国主義と対決したが、他方において、植民地化の危機からの脱出を図ろうとして、逆に弱肉強食の論理にのめり込むという、倒錯した「民族独立」のあり方を退けた。この両面作戦には、まさしく国境を超えた魯迅の深い人間愛が示されている。

#### 四 ロマン・ロランと中国

正反対の個性を持つ文学の形象を創造しながら、共通する思想的主題に到達したロランと魯迅は、1920年代にフランス留学中の中国青年の敬隠漁を媒介として、精神的な交流が始められた。敬隠漁はロランの作品を中国語に、魯迅の作品をフランス語に翻訳する最初の人である。敬隠漁が訳したロランの『ジャン・クリストフ』と魯迅の『阿Q正伝』はそれぞれ、中国の『小説月報』（1926年1月号）と、フランスの『Europe』誌（1926年5・6月号）に掲載された。これがきっかけとなって、東洋の文明を敬慕してきたロランは魯迅という中国の賢智を得られ、また、寂寞の中に苦闘していた魯迅はロランというフランスの知音を得られた。

ロランは『阿Q正伝』を読んで深い感動をおぼえ、「この風刺の写実作品は世界的なものだ。フランス革命の時にも阿Qはいた。私はいつまでも阿Qのあの苦しげな顔つきを忘れることができない」と語った（26）。魯迅への理解と好意を伝えるために、ロランは魯迅あての手紙を書いた。この手紙は敬隠漁を経由して送られたが、長くフランスにいた敬隠漁は中国文学界の事情を詳しく知らず、この手紙を、魯迅と対立するグループの「創造社」に送ったため、魯迅は永遠にこれを受け取ることができなかった（27）。他方、魯迅もロランに深い敬意を抱き、日本人の中沢臨川と生田長江の共著『ロマン・ロランの英雄主義』を中国語に翻訳し、また、彼が指導した雑誌『原莽』の第7・8期（1926年4月）を『ロマン・ロラン特集号』に編集して出版した。魯迅にとって、ロランは真の偉大な「精神界の戦士」であった。

ロマン・ロランは、中国において最も尊敬される西欧文学者の一人である。ロランに対する中国知識人の尊敬は、ロランと同時代のフランスの彼に対する尊敬をはるかに上回るとさえいえる。この尊敬は決して一時的なものではなく、数10年来ずっと持続してきたものである。このことは、すでに相浦泉の実証的な研究によって明らかにされている。

はやくも20世紀初頭において、ロランは「五・四」新文化運動をリードした雑誌『新青年』（1916年10月2巻2号）に紹介された。20年代から、有名な作家の茅盾が編集に加わった雑誌『小説月報』と、魯迅が指導していた雑誌『莽原』によって、ロランの伝記と作品などが多く掲載された。ロランが「ジャン・クリストフから彼の中国の兄弟たちへ」というメッセージを通じて、中国人に友愛の手を差し伸べたその時から、ロランは中国の青年に広く知られ、彼の作品は青年たちの人生の苦悩の慰め、光明を求めるための燈台、奮闘の途上の恩師とよい友になった。茅盾・巴金・老舍・丁玲や、また戯曲家の田漢など、中国の新文化啓蒙時代に現れた多くの優秀作家はみな、ロランから深い影響を受けたのである。



30、40年代になると、さらに多くのロランの作品が中国語に翻訳された。その中で、最も影響が大きかったのは、中国の優れた翻訳家の傅雷が翻訳した名著『ジャン・クリストフ』と『ベートーヴェンの生涯』および他の英傑伝であった。これらの訳著は中国の知識人や革命青年に大変親しまれ愛読され、彼らに大きな感銘と鼓舞を与えた。当時の貧しい青年たちは、これらの名著を宝物とし、手から手に渡して愛読した。1944年、ロランが死去した時、中国の文化界はこの最も優れた恩師と友を失ったことで深い悲哀に包まれ、多くの知識人は追悼の文章や詩を書いて、ロランへの深い景仰と高い賞賛を表したのである。

1949年中華人民共和国が成立した後も、依然として、ロランは中国の文化界に尊重され続けた。1953年、傅雷訳『ジャン・クリストフ』の改訳版が発行された。1955年に雑誌『訳文』に「ロマン・ロランについて」、雑誌『文芸報』に『ロランの戦時日記』などが載せられた。また、1957年に傅雷訳『ジャン・クリストフ』は人民文学出版社によって53年版が再発行された。もちろん、周知のように、中国において1958年に反右派闘争が行われ、また1966年から10年も続いた文化大革命が発生し、その間、ロランは批判の俎上にのせられた。しかし、この時期は中国の文化史から見れば、一つのきわめて異常な時代であった。その時、中国人はただ一つの権威に対する絶対的な信仰を強要され、一人一人の個人としての思考が許されなかった。それは西欧の文化を拒絶すると同時に、中国文化をも無闇に破壊する時代でもあった。多くの文化人が迫害され、善良な中国人は心がぼろぼろになるまで傷つけられた。当然、この時期には、中国人の本当の心からの声が聞こえるはずはなかった。

この異常な時期が過ぎ去ると、ロランは再び中国知識人が敬慕する最高の西欧文学巨匠であり、再びというより、であり続けたといった方がよいかも知れない。このような思想的雰囲気は、1989年天安門事件前後まで持続してきた。1980年、傅雷訳『ジャン・クリストフ』が再度発行された時、この名著は大学生や知識人に広く愛読された。1989年頃の全国重点大学に対する調査によると、『ジャン・クリストフ』の貸出率はずっと第一位であった。人の精神を窒息させる文化大革命時代をくぐり抜けた知識青年、自分の思考を停止して国家イデオロギーに任せた自身の過ちに気がついた若者たちは、ロマン・ロランに熱烈に憧れた。

ところが、改革開放が10数年行われ、経済の繁栄を見せ始めている今、中国は理想を冷笑し、実利を大義名分として掲げる時代となり、ロランを読む人はだいぶ少なくなっている。人々の話題は金儲けの方に集中し、ロランの小説を熱く議論する青年学生があまり見られなくなった。かつて19世紀末のフランスに見られたような、精神の頹廃と政治の墮落は、20世

紀末の物質文明へ走っていく中国にも現れてきた。もちろん、ロランを尊敬し続ける中国人は少数ながら存在する。ロランの研究者も僅かでありながら、依然として真剣にロランを研究し続けている。彼らは文革の動乱時代にロランにかかっていたイデオロギーの深い霧を追い払って、ロランを再評価し、そこから愛と理想、奮闘と創造という普遍的な精神を導き出そうとしている。

それらの業績の中で研究者が関心を寄せた問題の一つは、ロランと中国伝統文化との親近性である(28)。これらの研究者たちからみれば、ロランが中国人にもっとも親しまれるのは、やはり、彼が人間の心に潜んでいる様々な矛盾を透して、その本質を見抜き、それらの矛盾を乗り越えて、大自然と合体するということである。中国の「道家」の哲学には、「物我双忘」(物と我をともに忘れること)によって最高の実在と一体化する、という思想がある。ロランが卑俗な物質主義や小我を克服して、全人類を抱き込もうとするような精神は、「道家」のような中国聖人の思想に似通っているので、きわめて親しく感じられる。

ロランの思想形成における「三つの閃光」も、中国の研究者たちが注目するところである。彼らは「三つの閃光」から、ロランと中国の伝統的自然観との親近性を感じている。ロランの精神的危機を救った汎神論者としてのスピノザは、神即自然、つまり一切万有は神であり、神と世界とは一体であるとした。この汎神論の思想には、人間の靈感と神との融合を最高の境界とする老子の思想との類縁性が見られる。また、トルストイの『戦争と平和』に描かれたような、大自然がすべて我が心の中にあるというような感激も、「宇宙即吾心、吾心即宇宙」という中国哲学の主要な命題を想起させる。現にトルストイは孔子・孟子・老子・荘子などの哲学を知悉していた人物である。

上述のように、中国の研究者は中国文化の根底からロランとのつながりを探ろうとしている。この研究には、現在の精神的な矮小化を乗り越えて、ロランが永遠に中国人に親しまれていくという期待と確信が込められているといえる。

#### 注：

- (1) 『回想記』『ロマン・ロラン全集』17巻(みすず書房1960年)、52頁。
- (2) 「三つの閃光」『内面の旅路』『ロマン・ロラン全集』17巻、297-314頁。
- (3) 『ベートーヴェンの生涯』岩波文庫1996年15頁。
- (4) 同上。

- (5) 『『呐喊』自序』『魯迅全集』第一卷（人民文学出版社1987年）、417頁。
- (6) 「破惡声論」『魯迅全集』第八卷、23頁。
- (7) 『魯迅全集』第一卷、63-100頁。
- (8) 「兩地書」第八信、『魯迅全集』第十一卷、31頁。
- (9) 『『呐喊』自序』前掲書、419頁。
- (10) 同上、417頁。
- (11) 「真勇」とは魯迅の使った言葉であり、真の勇氣という意味である。1926年魯迅は中沢臨川と生田長江の共著『ロマン・ロランの英雄主義』を翻訳した。その訳題は『羅曼羅蘭的真勇主義』である。
- (12) 『『ジャン・クリストフ』への序』『ロマン・ロラン全集』1巻（みすず書房1959年）、4頁。
- (13) 「ジャン・クリストフへの告別」『ロマン・ロラン全集』4巻（みすず書房1959年）、387頁。
- (14) 「破惡声論」前掲書、25頁。
- (15) 『『呐喊』自序』前掲書、419頁。
- (16) 「狂人日記」『魯迅全集』第一卷、426頁。
- (17) 『阿Q正伝』の後、魯迅の文学題材は変わった。農民の素朴で美しい心を描くような作品が現れた。晩年の魯迅はまた、中国の古代神話に取材した作品「補天」を書き、慈愛の神・女媧を、人類の幸福を守るために自分の身を粉々にするまで奮闘する人物として再現した。さらに、魯迅は毛沢東や朱徳をはじめとする労農紅軍の英雄的な戦いに希望を感じた頃、中国の古典を題材にして「非攻」、「理水」などの作品を書いた。「非攻」は戦国諸子の一人で博愛と戦争反対論を主張した墨子の物語である。「理水」は禹が刻苦奮闘して「治水」（大洪水を治めること）に成功した物語である。魯迅は西洋から発見した近代的人間像を古代中国人の再現によって蘇えらせた。
- (18) 「ユルム街の僧院」『回想記』『ロマン・ロラン全集』17巻、54-55頁。
- (19) 同上、56頁。
- (20) 『ジャン・クリストフ』第七巻「家の中」、『ロマン・ロラン全集』7巻（みすず書房、1953年）、275頁。
- (21) 日本語訳は相浦杲「ロマンロランと中国文学」による。『ユニテ』第3期第6号（ロマンロラン研究所1977年）、13頁。
- (22) 文化の面においても、ロランは全人類を抱え込む博大な心を示した。ヨーロッパ優越論

が全世界を席卷した背景の中で、ロランは東西文化が補完し合うような、人類文化の大同世界を造るよう、知識人たちに呼びかけた。

- (23) 「破悪声論」前掲書、32頁。
- (24) 同上、33-34頁。
- (25) 「写真のことなどについて」『魯迅全集』第一巻、184頁。
- (26) 相浦泉「ロマン・ロランと魯迅の『阿Q正伝』」『ユニテ』第3期第8号1978年、11-15頁。
- (27) 相浦泉によると、1928年から2年間ほど、「創造社」はプロレタリア文学を主張し、魯迅や茅盾らを旧文壇の大御所だとみなして、極左的な立場から無茶な批判を加え、魯迅らとの間に論戦を展開した。手紙の握りつぶし事件は、おそらくこの時期におこったのである（「ロマン・ロランと中国文学・附補遺」『ユニテ』第3期第6号、21-22頁）。
- (28) 許蘇民「羅曼羅蘭与中国文化」（『福建論壇：文史哲版』1990、5）は、その代表的な研究の一つである。

付記：本稿は主として新村猛、新庄嘉章、伊藤虎丸、相浦泉および羅大岡、柳鳴九、何仲生、錢林森、許蘇民、李清安などの諸氏の研究業績を参考にした。